

新刊紹介

蔡 徳麟著

『東洋の智慧の光—池田大作研究—』

南 紀 子

1. 概説

本書は、2003年3月に、中国・天地図書有限公司から発刊された『東方智慧之光—池田大作研究論綱』の日本語翻訳版として刊行され、創立者に関する中日国交正常化と世々代々にわたる中日友好への歴史的貢献と人物研究、及びその基盤となった思想・哲学をめぐる研究書である。著者の蔡徳麟教授は、哲学と社会科学の専門家としての学際的視点及び中日両国での創立者との出会いや交友を重ね、日本では幼稚園から大学にいたる創価一貫教育の実情と様々な中日文化交流のイベントを精力的に視察してきた観点をもとに、創立者の平和思想(第1章)、仏法を根底とするヒューマニズム哲学(第3章)、宗教的理念と実践(第4章)、歴史観(第5章)について論じている。

著者は深圳大学の元学長であり、中日文化交流に献身的に尽力され、その重要な友好の歴史を創立者と共に残してきた大学者でもある。本書では、創立者をめぐる中日の友情にもペンを振るい、民衆を主体とした民際交流で友好の絆を万代に強め、深めていこうとする創立者と中国指導者との堅固な「熱き友情」(第2章)と当意即妙の応答等も紹介している。本書の構成順に表記すると、

第1章 日中友好を推進した池田大作の平和思想

第2章 池田大作と中国指導者の熱き友情

第3章 池田大作の仏法ヒューマニズム哲学

第4章 若き世代を鼓舞する池田大作の理念と実践

第5章 地球の未来を拓く池田大作の歴史観

である。

幸運にも筆者は幾度も、創価大学で真剣なる研究に没頭しつつ、中日友好と中日文化交流に直向きな情熱を注いでおられた蔡徳麟教授の英姿を仰ぐ好機に恵まれた。しかも、キャンパス内はもちろん各所で、創立者夫妻は中国をはじめ世界中の知性や各界の名士たちと友好を広げ深められる際、後継の我々に「友好に奮闘する精神」を直に教えて下さっている。そこで本稿では、本書全編に貫かれているその「友好に奮闘する精神」を中心に、「中日友好の歴史を開いた深圳の格別な縁」、「『永遠に日中友好に奮闘する』精神」と「熱き友情」、「『日本第一の友好の使者』の姿勢と哲学」に絞って論考したい。

Noriko Minami (創価大学女子短期大学助教授/センター員)

2. 中日友好の歴史を開いた深圳の特別な縁

著者は「本書を中日友好のためにたゆまず努力してきた中日両国の人民に、中でも両国の青年に捧げたい」(262頁)との心情を吐露しているように、本書は創立者こそが中日国交正常化のために命懸けで行動し、その実現に至るまでの「傑出した『井戸を掘った人』」であることを歴史的事実とその経緯を詳細に積み重ねながら論じている。そして、本書には先人の哲学と情熱と労苦と偉大な功績を訴え、称えながら、中日友好の心が世々代々に伝えられてほしいとの著者の熱願が随所で感じられてならない。1974年、創立者が「何より第一の戦友」⁽¹⁾と語る香峯子夫人と共に最初に中国を訪問したのは、香港の九龍駅から罗湖駅まで列車に乗り、国境の橋を歩いて渡られた広東省の深圳であった。

この中日友好の歴史を開く第一歩が他ならぬこの深圳から始まった事実は、著者にとって特別な意義を持っていると思われ、その史実は写真でも中国語(繁体字)版と共に掲載されている。著者の蔡徳麟教授は、この特別な縁深き史実にも鼓舞され、中日を結ぶ世々代々への友好の歴史を築いていく社会的使命を深く感じたに違いない。本書のあとがきにおいて、1994年1月の第9次訪中の折りにも初訪中と同じルートを選ばれたことも特筆している。その当時、著者は深圳大学の学長として「中国人民の“老朋友”(古くて親しい友人)」を熱烈に歓迎し、創立者との交友がこの時期から始まったと伝えている。本年の2004年は創立者夫妻が初訪中し30周年の佳節を迎えるが、この中日友好を打開し、発展させた「教育」の力は限りなく大きい。

3. 『永遠に日中友好に奮闘する』精神と「熱き友情」

第2章の「池田大作と中国指導者の熱き友情」には、新中国の建国後、周恩来が創価学会を「中日友好の運動を進める上で信頼にたる組織として、重視するようにな」(105-106頁)り、創立者を中国に是非招待したいとの意向を有吉佐和子が伝えたところから、周恩来夫人の鄧穎超、鄧小平、李先念、華国鋒、胡耀邦、江沢民、李鵬、胡錦濤との心と心の通い合う誠に尊き親交をもとに、それぞれ中日友好の重要な歴史が綴られている。この「熱き友情」の中で、絶大な信頼の絆の美しさに、筆者が最も感銘深く拝するのは、周総理が逝去された後も、創立者夫妻は「鄧穎超と8回にわたって会見し、真心からの情誼を温めあった。」(112頁)ことである。こういう正真正銘の信頼関係と友好を我々は学び、受け継いでいくべきだと痛感する。

更に、女史は「私たちは家族です」とまで述べ、自宅に2度も招いている。「全身全意(心の底から)、人民に奉仕する」⁽²⁾と周総理と誓いあった「不二の『分身』」⁽³⁾である女史が中国の国宝にも値する周総理の形見である象牙のペーパーナイフと女史自身が愛用していた玉製の筆立てを日本の「家族」⁽⁴⁾に贈った。創立者はそれらを『永遠に日中友好に奮闘する』精神の象徴として(114頁)大切にされ、我々にその精神を教育して下さっている。奇しくも、本書の序文を寄せられている孫立川博士は、創価大学や東西の創価学園を「訪問するすべての中国人は、彼らの純粋な友情のほとばしりに感動せずにはいられない。こうした光景は、日本の様々な学校の中であって、極めて貴重なものである。ここからも、池田氏が常に日中友好のために心を砕いていることが伝わってくる」(14-15頁)と証言している。

4. 「日本第一の友好の使者」の姿勢と哲学

著者は「友好の後継者という点においては特に、池田氏は際立った功績を残している。この点で、他に比肩しうる人を私は知らない。」(133頁)と述べ、過去の業績だけでなく、「未来へ続く影響力という意味で日本第一の友好の使者といっても過言ではない」(133頁)と評価している。「池田氏の対話の妙はずばりその人の本質そのものに迫っていく」(122頁)と分析し、「池田氏は、相手が国家指導者であっても、青年であっても、あるいは市井の人びとであっても、一貫して同じ姿勢で臨んでいる。だからこそ、心からの信頼が寄せられると言えるのではないだろうか。」(140頁)と考察している。

こうした創立者への信頼は、これまでもしばしば語られてきた偉大な人間性と振る舞いに因り、これは創立者のヒューマンイズム哲学の根底になっている仏法の平等大慧(一切衆生を平等に利益する仏の智慧)を体現されていることの証左であろう。著者が創立者のこのヒューマンイズムを「二十世紀のヒューマンイズムの宝庫の中に輝く至宝」(191頁)と讃嘆し、「世界の民衆から敬愛されるこの思想」(191頁)というのは、確かに西洋にはない東洋から生まれた生命の尊厳を第一とする生命観、世界の民衆を覚醒し、万人を共々に幸福にしていく力を有し、中日友好、世界の平和創造になくしてはならない智慧と言えるのではないだろうか。

(注)

- (1) 『池田大作語録 人生の座標』(グラフ社、2001年) 21頁。
- (2) 池田大作『世界の指導者と語る』(潮出版社、1999年) 182頁。
- (3) 同上、179頁。
- (4) 鄧穎超女史が創立者を「家族」と呼び夫妻の宝物を創立者に贈られたことは、ノーベル・ファミリー・ソサエティの会長であるマイケル・ノーベル博士が、奇しくも中日国交正常化満30周年の11日前にあたる、2002年9月18日に「きょう、池田会長はノーベル家の“家族”になりました」と、深い親愛の情を寄せ、“世界に1枚”とも言えるノーベル家の貴重な宝である「銘板」を贈られたことと重なり、創立者への絶大なる敬愛の念を感じるものである(聖教新聞2002年10月16日号3面参照)。

(鳳書院 2003年5月刊、266頁)